

特 賞

**「松阪もめん」を中心に
多角的視野を付加した
中学校家庭科における金融教育**

三重県 伊勢市立五十鈴中学校
西村 朱美

1. はじめに

家庭科には「児童・生徒個人を自立へと導く」「多様な価値観やライフスタイルが存在する中で、いろいろなヒトやモノと共生することができる能力を養う」ということが課せられていると考えられる。すなわち、「生活経営能力を備えた自立と共生ができる人間の育成」が家庭科の大きな目標になるが、それは「流行や自己の嗜好には敏感であるが、メタ認知力が乏しく、アイデンティティ（自己同一性）に欠ける」「利己主義に陥りやすく、自己が所属するシステムやグローバルな視点に立って行動することが難しい」「学校知が生活知を保障しなければならないほど生活体験が乏しい」という現代中学生像が大きく影響を及ぼしていると考えられる。

また、2002年度より完全実施されている教育課程では家庭科の授業数が不足しているということ considering、「生きる力」育成のためには、単にモチベーションが高まるだけのものではなく、自己反省や自己開発を促してアイデンティティを形成し、自尊感情を深めたり、他者理解をしたりすることができるような、あるいは真の生活を実感した上で、より良い生活を営もうとする姿勢を育むことが可能となるような質の高い教材・教具の開発をしたいと考えた。そこで、地域に根付いてきた「松阪もめん」という一つのモチーフに様々な教育価値が付加できるような題材を設定したわけであるが、その中に金融教育を目指したものもあり、本論文では全体像を押さえながら、特にその部分に焦点を当てて論じたい。

2. 目標および教育の分野

- ① 体験学習やシェアリング活動を通して、生活者としてのアイデンティティを深めるとともに、他者を理解しようとする姿勢を養う。
自己理解・他者理解のための教育
- ② 郷土に伝わる民芸品に関わることを通して、先人の知恵や苦勞について知り、共感することができる。
キャリア教育、他者理解・地域理解のための教育
- ③ なみ縫い、まつり縫い、およびミシンを用いた直線縫いの目的と方法を知り、それらの技術を習得する活動を通して、衣生活における簡単な補修ができるとともに、循環型社会の実現を目指した自然環境保護保全のための創意・工夫を知る。
被服技能を養うための教育、環境教育
- ④ 物作りおよびその販売など企業の活動を疑似体験することを通して、製品を創作したり、利益を追求したりするとともに、将来における自己の消費生活や就労生活に活かそうとする姿勢を養う。
金銭教育、プロシューマーになるための教育、キャリア教育
- ⑤ 地域の人々や商品購入者たちとの交流および持続可能な社会の実現に向けた収益の使用方法を考えたり、実際にボランティアに貢献したりする活動を通して、貨幣価値について考えるとともに、システムの一員としての共生について考えることができる。
共生のための教育、環境教育、金銭教育
- ⑥ 調べ学習の発表を通して、プレゼンテーション能力を高める。
プレゼンテーション能力開発のための教育

「松阪もめん」という一つの教材を核として、いろいろな目標を総合的に達成しようとしているので、生徒の意識が分散していかないように十分配慮していく必要があるが、将来、経済社会に出ていく子どもたちが、「お金の意義、機能や価値について知り、金銭感覚を問い直し、鍛える機会を持つこと」「自己のみならず自己が所属するシステムおよびグローバルな視点に立って、経済社会に暮らす人間の営みの現状について把握し、それに基づいた行動をしようとする能力を

育成するための時間を仲間と共有すること」、あるいは「消費者として消費行動を自己決定していく方法を考える時間を持つこと」は非常に大切なことだと思われる。そこで、①～⑥の目標の中で、特に②、④、⑤を金融教育として位置づけたいと考えている。

3. 実践結果

一年生時から二年生にかけて取り組んでいる実践で、平成17年9月15日現在、添付資料1に示す指導計画8まで終了している。以下に、これまで実践した部分についての内容および結果と考察について述べるものとする。

① 松阪もめんの歴史（指導計画1）

学校区に伊勢神宮を有しながらも、その神宮に関わって発展してきた産業に興味を持ったり、理解を示したりする生徒はほとんどいない。そこで、「神宮の機殿（はたどの）のある松阪市に、室町時代に棉（わた）が渡来し、木綿織りが盛んとなり、三井をはじめとする松阪商人の手で売り広められたこと」「藍染めを基調としたシマ柄が江戸庶民に受けたこと」「歌舞伎の役者さんがシマのきものを着ることを『マツサカを着る』というほど、シマといえば松阪もめんが代表的であったこと」「松阪もめんの特色のシマ柄は、松阪から安南（今のベトナム）に渡った、貿易商の角屋七郎兵衛のもたらした“柳条布”に由来していること」を中心に、松阪もめんの発祥をおさえた歴史について学習するとともに、作品作りへのモチベーションが高まるようにした。

学習の成果としては、添付資料2に示すように、自分たちが暮らすゆかりの地で松阪もめんを生み出した先人たちや、その伝統品を絶やすことなく後世に受け継いできた人々に対する尊敬の念を抱いたことがあげられる。この気持ちは、就労すなわち職業に就くことに対する心構えにつながるものであり、キャリア教育の根幹を支える心情として大切だと思われる。特に、最近では、中学生でもインターンシップ事業に取り組むことが多く、本校でも二年生時に実施しているが、その活動を深める上でも有意義であったと考える。また、その伝統的な作品の製作に自らが携わろうとしていることに期待を持つとともに、誇りさえ感じていることも、生徒の感想から読み取れるが、この気持ちは「自己認識と職業選択の条件」を考えるヒントになり、キャリア教育に欠くことのできない大切な視点として留意しておきたい。

② オリジナル商品の開発・製作（指導計画4.6）

まず、自分たちの技術で製作可能なオリジナル商品を開発しようということで、作ってみたい商品をデザインするという課題を出した。そして、クラス単位でできあがったデザイン画をシェアリングして、売り出す商品の種類（ポケットティッシュカバー、文庫本カバー、コースター、巾着の4種類）を決定したわけであるが、残念ながら、生徒の技術面での力不足や、クリエイティブに思考することに慣れていないということがわざわざして、創意・工夫あふれるオリジナル商品開発には至らなかった。しかし、生産者（売り手）サイドが抱える新商品を発案、企画することの難しさを体験でき、「お金を出して簡単に買い換えたりする自己の姿勢を反省して、モノを大切にしていこう」という気持ちが育めたことは効果であったと考えたい。

製作に関しては、製品を世に出すということで、それまでに経験してきた被服実習より丁寧に仕上げようとする意気込みが感じられた。実際には、材料（松阪もめん）の仕入れや販売に協力をしていただくお店の方で、製品を市場に出せるかどうかのチェックが入るということで、生徒の意欲はさらに深まったようである。これは、単に金融教育という面だけではなく、被服実習のためのモチベーションを高めるといった効果をも生み出したといえる。指導者としては、子ども一人ひとりの状況を把握しながら励ましたり、やり直しを求めたりするという場面が増えたので負

担ではあったが、生徒は、何度もやり直しをする中で、自己の技術面での向上を目の当たりにすることができ、その達成感は大きかったといえる。そして、その達成感は「商品の開発・製作には、生産者（売り手）側の多大な苦労や努力があることがわかり、これからはモノを大切にしていこう」という感想にもつながっている。

オリジナル商品の開発・製作を通して、プロシューマーとしての意識作りが期待できると考えられる。

③ オリジナル商品販売に関わる工夫（指導計画 7）

「賢い消費者」とは、どういう人のことをいうのか。最近では、“needs”と“wants”を用いて論ぜられる傾向が強いように思われるが、私としては、その点を押さえた上で、生産者（売り手）側の意図や企画を含め、購入しようとするものの本質をしっかりと読み取ろうとする姿勢を育みたいと考えている。そこで、生産者（売り手）側の活動を疑似体験する時間を設定したわけであるが、この学習を通すことにより、単に消費者（コンシューマー）としての立場だけではなく、そこに生産するという営みをも取り入れたプロシューマーとしての視野に立つことができるので、消費者教育を深めることに効果的であると考えている。

(i) 商品の価格決定

学校教育の中で実践することなので、とりあえずは「材料費を下回らないように」という目標だけで価格決定をした。その後、「一般企業なら原材料費以外に何を条件にして価格を決めなければならないのか」ということについて意見交換する場を設定すると、「人件費」「広告費」「運送費」「テナント代」「次活動への資金」など、かなり本質をつく意見が多数出た。そして、話し合いを進めていく中で、「原価にかなりの儲けを見込まないと商売は成立しない」「市場で販売されている商品価格が適正か否か考えていく必要がある」という発見につながったようである。この発見は、「モノを大事にしない（現に、落とし物があっても、よほど高価なものでない限り、名乗り出てくる生徒は少ないという実態がある）」「買えば済むと考えがちである」自分たちの生活を反省する機会にもつながったが、これは「お金を大切にする」という姿勢にもつなげられ、金融教育になりえたと考えている。

(ii) 利益をあげるための工夫

「中学生としてできる工夫は何なのか」ということで考えさせたところ、「広告作り」という意見が容易に出された。しかしながら、いざ広告に掲載する内容を考え始めると、「商品名、価格、販売日時、販売場所」という機械的に表示できるものは簡単に連想することができたが、生産者（売り手）側の意図を確実に表現する「キャッチコピー」に関しては、なかなか良案が思いつかなかったようである。生徒たちは、その勘考するというプロセスを通して、生産者（売り手）側として自らが市場に送り出している製品に責任を持ちつつ、過大広告にならないように配慮しながら、消費者の購買意欲を喚起するようなコピーを作成することが重要であることを実感できたようである。そして、その実感は、「消費者として与えられた情報をしっかりと吟味し、取捨選択していく資質が必要である」という発見につながり、効果的であったと考える。

④ オリジナル商品販売による収益の利用方法（指導計画 8）

自分たちの商品が売れた後に生じる収益をいかに活用するかということで話し合いの場をもったところ、「パーティを開く」というような自己利益につながる発想を持った者もいたが、「パーティが開けるほど儲かるはずがない」「中学生が作った商品がそんなに売れるわけがない」という現実的な意見をきっかけに討論は深まっていき、最終的には「わずかなお金でもボランティア

に利用しよう」ということになった。指導者としては、日本の貨幣価値では、生徒の気持ちを活かし、充実感・達成感を味わわせることは難しいという思いと、単に、金融教育だけではなく、生活者としてグローバルな視点で問題（人権教育や環境教育とタイアップできると捉えている）に立ち向かおうとする精神を育成したいという思いが重なり、「世界を変えるお金の使い方⁽¹⁾」という本を教材として取り上げることにした(学習の流れは、「Ⅰ. 黙読して第一次感想を書く、Ⅱ. 本文中の50のテーマをさらに12に絞り、グループ別に調べ学習をする(課外)、Ⅲ. 調べ学習の結果をまとめ、プレゼンテーション大会を開き、何のテーマにボランティアとして寄付をするのか決定する」である)。その結果、**添付資料3**に示すように、ほぼ全員が、貨幣価値および自身のお金の使い方について問い直し、反省し、その上で今後の生活にその思いを反映させていこうという意識が芽生えたことが窺える。すなわち、「日本は貨幣価値が低い反面、モノにあふれ、使い捨て志向や百円均一志向というような経済背景や、マス・メディア業界やIT産業の発展により、購買欲をあおられるという状況があるので、非常に簡単にお金を使いがちである」ということや、「世界規模で捉え直してみると、100円、200円というお金も大変貴重で、その価値を理解したお金の使い方を探り、それを身につけていく必要がある」ということを認識させることができ、非常に効果的であったと考えられる。

4. 今後の実践計画と課題

① オリジナル商品の販売（指導計画9）

伊勢神宮近くに、おかげ横丁という郷土の特産物を販売する店舗が集められたところがある（生徒が使用した松阪もめんも、その中の一店舗から購入している）。その横丁内では、四季折々に催し物が開かれているが、その一つの「手づくりで楽しむ小物展」に参加させていただき、販売させていただく予定である（売り切れない場合は、学校の文化祭で即売コーナーを設ける予定である）。一般市場の中で、「モノを売って利益を得る」ということが、いかに難しく、労を要することなのか、実際に体験をしてみてもわかることがたくさんあると思うが、この活動を通して、子どもたちが「アイデンティティを深め、自己のキャリアについて展望をもつことができる」というところまで高められればよいと考えている。

② オリジナル商品販売後の収支決算（指導計画10）

結果として、黒字で終わるのか、赤字で終わるのか、見通しが見つからないところであるが、いずれにせよ、「就労と報酬の関係」「市場価格の妥当性」など、いろいろな視点からのアプローチを可能にするものであると考えている。

③ プロシューマーとしてのアイデンティティ（指導計画11）

これからの生活者には、既存の商品を購入して消費する行動だけではなく、「自分の望む商品をクリエイティブに生産して、生活をマネジメントしていく能力」すなわち、プロシューマーとしての資質が求められている。「生産」というプロセスは、日常、自分が置かれている立場とは反対側の視点から物事を考察する機会を与えてくれるので、価値判断能力を深めてくれると思われるが、これは金融教育に大いに貢献するのではないか。確かに、日本社会は「生産」と「消費」という機能がしっかりと役割分担されている傾向が強く、生徒自身の実生活を見ても、「生産者」という自己認識を育成していくことは、非常に難しいとは思いますが、一連の学習のまとめとなるように十分に配慮して進めたい。

5. おわりに

「自分たちの力で商品を生産し、それを売ってお金を儲ける」という課題を提示した時の子どもたちの反応は、「自分たちはまだ中学生なのに、そんなことができるのだろうか」と不安を感じつつも、未知の体験に対して何かを期待するという感じであった。その期待感は、従前の被服実習よりもモチベーションを高め、維持させることができたし、より達成感を抱かせることにもつながっている。ここに、家庭科の中にかに金融教育を組み入れていくのかというヒントがあるのではないだろうか。その点を考慮して、今後の実践にあたりたいと思う。

参考文献

(1)「世界を変えるお金の使い方」 責任編集 山本良一 ダイアモンド社 2004年

指導計画（全35時間）と目標との関連

学習内容	時数	主に達成したい目標
1. 松阪もめんの歴史とオリジナル商品開発のための意識の育成	1	②
2. 手縫いの練習 ・玉結び、玉止め、なみ縫い ・三つ折り、まつり縫い	2 (1) (1)	①、②、③
3. 環境問題 ・4R (Recycle, Reuse, Reduce, Refuse) ・伊勢市およびドイツのごみ問題	2 (1) (1)	③
4. オリジナル商品の開発 ・デザイン画のシェアリングおよびオリジナル商品の決定 課外 オリジナル商品のデザイン画の作成	2	①、②、③、④
5. ミシンの直線縫いの練習	1	①、②、③
6. オリジナル商品の製作 ・ポケットティッシュカバーの製作 ・文庫本カバーの製作 (早くできた生徒はコースター、巾着の製作)	16 (4) (12)	①、②、③、④
7. オリジナル商品販売に関わる工夫 ・商品の価格決定および利益をあげる工夫 ・商品につけるメッセージカードの文と広告のシェアリングおよび決定 ・広告の仕上げ 課外 メッセージ文と広告の作成	4 (1) (1) (2)	①、④
8. オリジナル商品販売による収益の利用方法 ・ボランティアが必要な世界の情勢 （「世界を変えるお金の使い方」利用） ・世界情勢に関する調べ学習の発表 ・持続可能な社会に向けての収益の利用方法の決定 課外 世界情勢に関する調べ学習	4 (1) (2) (1)	①、⑤、⑥
9. 課外 オリジナル商品の販売		④
10. オリジナル商品販売後の収支決算 課外 オリジナル商品販売による収益の寄付	1	④
11. まとめ ・プロシューマーとしてのアイデンティティ ・持続可能な社会の実現のための共生	2 (1) (1)	①、③、④、⑤

「松阪もめん」の歴史学習後の生徒の感想

- 松阪もめんは、昔生まれたものだけど、今も作っている人がいてすごいと思った。伝統を受け継いでくれる人もいてすごいと思った。私も、頑張って作りたいと思った。
- 伊勢の歴史の上で、とても重要である松阪もめんを使って、江戸に店を構えた松阪商人のように自分たちで流行を作りたいと思った。
- 松阪もめんという伝統的な工芸品にかかわることができてうれしいです。松阪もめんを使って品物を作れることを、大変うれしく思っています。
- 松阪もめんは初めて知りました。伊勢神宮に関係のある伝統的な物があるとは、まったく知りませんでした。ぼくは、不器用でさいほうは苦手ですが、売れるような商品がんばって作りたいです。
- 松阪もめんは非常に歴史のあるもので、それを使って作品を作るということは、とても光栄なことです。何を作るにしても松阪もめんをあつかうのは初めての経験なので、ていねいに上手に作りたいと思います。

「世界を変えるお金の使い方」を利用した学習後の生徒の感想

- 世界を変えるお金の使い方を讀んだ。ぼくは、当たり前のようにジュースを買ったりしてお金をいっぱい使っている。でも、この本には百円でできることがいっぱいあった。百円で、予防可能な感染症で死亡率が高いポリオという病気から、ミャンマーの子ども5人を守ることができる。百円でバングラデシュのストリートチルドレン20人がコップ1杯の牛乳を飲むことができる。七百円でおにぎり20個を路上生活の人にていきょうできる。ぼくたちが毎日当たり前のように使っているお金が、こんなに世界に生きる希望をあたえてあげられることが分かった。その人たちの立場にならなければ本当の苦しみは分からないと思うけど、この本を讀んでいるとその人たちの苦しみなどの気持ちがほんの少し分かったような気もする。百円にこれほどの使い道があるのだから、ぼくはムダにお菓子をいくつも買うくらいなら募金でもしようかなという気持ちになった。
- この本を讀んで、改めてお金の大切さがわかった。100円が自分の手元にあったのならば、私なら自分のほしいお菓子とか買ってしまおうと思う。でも、この本はその100円でもっと良いことができることを実感させてくれた。例えば、ミャンマーの子ども5人をポリオから守ることができる。私は、ポリオのことは知らなかったが、お菓子を買って100円を使っている場合ではないと思った。100円で、ミャンマーの子どもが守れるなんて、すばらしいことだと思う。また、その他気になったのは300円でタイとカンボジア国境1m²の地雷を除去できることだ。地雷をふむと、手足がなくなって大変なことになってしまう。その地雷をたった1m²だけ除去することができるなんて、タイやカンボジアの人たちは大喜びすると思う。私だったら、外に出ることすらできないかもしれない。そんなこわい思いをさせる地雷。300円でできるのなら、ぜひやらなければいけないことだと思う。自分のおこづかいの少しを使うことで、よりよい世界をつくることのできるのなら、それは考えられないくらいすばらしいことだと思う。

- 私にとっては、100円の価値はそんなに高くないけど、ミャンマーやカンボジアの人の100円の価値は、命が助かるというくらいの価値になる。100円の価値にもおどろいたし、私は内心、私のお金の使い方が間違っているなあと思った。私が、例えば、120円の缶ジュースを買うのと、予防可能な感染症の中で死亡率が高く、手足に重い後遺症を残すポリオからミャンマーの子ども5人を守ることができる値段が同じなら、缶ジュースを買うのをがまんして、募金をした方が、人の役にも立つし、自分自身、何か少し幸せな気分を味わうことができると思うし、その募金したお金の価値もグーンと上がると思う。本に書いてあった100円や200円くらいで、人を救ったり、手助けをしたりなどができるなら、買いたいジュースや物などを少しがまんして募金なんかもしてみたいと思った。この本を読むまで「100円なんて」とか思っていたけど、この本を読んだ今は「100円でも人を救えるくらいの価値があるんだなあ」と100円の価値も上がったし、お金に感謝する気持ちが、前より強まったような気がした。
- この本の題名通り、たった100円で世界中にいる難民の人々や、子どもたちを少しでも助けられることが良くわかった。ポリオの一人分のワクチンが20円というのが、びっくりした。日本人には「たった20円」と思うことも、ミャンマーの人々にとっては、20円はとても大きい物なんだと思った。それに、内モンゴルだと、ポプラの苗木が1本10円なのはすごく安いなと思った。けれど、さっきも書いた通り、日本と外国のお金の価値観が全然違うから、日本人は何も分っていないと思った。日本は物にあふれているけれど、家にある子どもの頃のおもちゃだって、病院にいる子どもたちに夢を与える道具になるのは、すぐ捨ててしまうよりも環境にいいことだと思う。この本を読むと、これからの自分のお金についての考え方が変わると思うし、困っている人たちを助けたいという気持ちも出てきたような気がする。
- 私はこの本を読んでお金の大切さを改めて知りました。それは私が今まで思っていた以上に大切でした。例えば、「予防可能な感染症の中で死亡率が高く、手足に重い後遺症を残すポリオからミャンマーの子どもたち5人を守ることができる」と「大きめのお風呂を沸かすガス代」は同じ100円でできます。100円で子ども5人も守ることができるのです。そんなことなんて考えずに私たちは100円でジュースを買います。その100円で私たちがジュースを買わなくても死ぬことはありません。でもミャンマーの子どもたちに使わなかったら、もしかすると死んでしまう子がいるかもしれません。こんな感じで、同じ100円でもこんなに差が出るんだなと思いました。私はこれを読んで、「1円でも10円でも、とても大切なお金なんだから、もっともっと考えて大切に使いたい」と思います。